

「老人力を発揮する」 ヨシュア記13章1節

I 導入部

おはようございます。9月の第二日曜日を迎えました。残暑が厳しいですが、主のお守りの中で、この週も守られ過ごすことができました。私は月曜日から北海道での伝道委員会、札幌、旭川、そして、上芦別教会での教会の補修応援、今回は牧師館の床と階段の補修でした。足手まといの私でしたが、少しはお手伝いすることができたと思います。梶原先生ご夫妻も、信徒の方々もとても喜んで下さいました。青葉台教会の皆様には、私の膝のために、ご心配をおかけしました。何とか守られて帰ってまいりました。お祈りに心から感謝致します。

本来、来週の15日が高齢者祝福の日でしたが、来週は私が山陰聖会の御用でおりませんので、今日、高齢者の方々のために、メッセージを準備しました。今日は、中高生のお友だちも共に礼拝しておりますが、「老人力を発揮する」という題で、ヨシュア記13章1節からお話ししたいと思います。

II 本論部

一、弱さが恵みとなる

「老人力」という言葉は、1997年に赤瀬川源平氏が提唱した概念です。物忘れがひどくなった、動けなくなったというような老化による衰えというマイナス思考を老人力がついて来た、というようにプラス思考へ転換する逆転の発想であって、赤瀬川氏は、一般的には、あの人はボケたとか、モウロクしたとか、年を取ったという言葉の代わりに、「あの人は相当老人力がついてきた」というように表現すると語っております。

シルバー川柳を紹介します。「アーンをして、昔ラブラブ、今介護」「オレオレと名乗って妻に すぐ切られ」「先寝るぞ」「安らかにね」と返す妻」「三時間 待って病名 加齢です」「延命は 不要と書いて 医者通い」「主治医から アルチューハイマーと 告知され」「年賀状 出さずにいたら 死亡説」「何回も 話したはずだが 初耳だ」「やめてくれ ただの寝坊で 脈とられ」「こんにちは 思い出せずに さようなら」「大事なら しまうな二度と 出てこない」「昼の顔 入れ歯外せば 夜の顔」「君の名は？ 老人会でも 流行語」このようにシルバー川柳は、マイナス面を前向きに、面白おかしくしているように思います。ですから、年を重ねるということや不自由になっていくという、いやな、辛い様子を笑いに変え、積極的な生き方を示しているように思います。

年を重ねた人、老人の特徴は忘れるということでしょうか。人の名前が出てこない、と

よくあるのかも知れません。しかし、忘れるということは、とても大切なことだと思います。老人力は忘却力と言えます。私たちは、忘れていいことや忘れなければならないことを忘れずにいて、覚えていて苦しむということが多くあるように思います。誰かに言われた言葉や態度が忘れられないで、その人のことを思い出すたびに、見るたびに、心が痛み、憎しみが増え、自分の心をどうにもコントロールできないで、病んでしまう、苦しみを増してしまうということがあるのかも知れません。勿論、大切な事柄も忘れてしまうということがあるでしょうが、覚えていなくていいことを忘れてしまうということは、心にも平安があるようにも思います。ですから、忘れるということは、ただ、悪いことだけではないようです。私たちの人生は、私たちだけのものではありません。私たちを創造された神様との共同です。神様が私たちの人生を導いておられる。老いるという事も、老人となるということも、神様が共にい続けていて下さるということです。神様が共におられるなら、年を取らない。病気にならないということではありません。神様が共におられても年を取り、老人となり、また、病気にもなります。それは、辛い事、悲しいことでしょう。しかし、イエス様は、私たちがどのような場合でも共におられ、私たちに背負い、慰め、励まし、強めて下さるのです。

二、神様は老人を用いられる

ヨシュア記 13 章 1 節には、「ヨシュアが多くの日を重ねて老人となったとき、主は彼にこう言われた。「あなたは年を重ねて、老人となったが、占領すべき土地はまだたくさん残っている。」と神様が語られた言葉があります。ヨシュアは、モーセに仕えていた忠実な人物でした。モーセがカナン偵察隊を 12 人選びましたが、ヨシュアはその一人でした。カナンを偵察した 10 人は、カナンの地を悪く言いふらしましたが、ヨシュアとカレブは、神を信じて攻め上ろうと言いました。ヨシュアは神様を信頼する信仰を持っていた人物でした。

ヨシュアは、モーセの従者として 40 年仕え、モーセの後継者として働いて、イスラエルの人々にカナンの地を分け与えました。この時のヨシュアは、80 歳を超え、90 歳肥えた年齢になっていたようです。何十年も働いて来た。もう十分でしょうと言いたい。良く働いた。よくやって来た。ご苦労さまということです。しかし、神様は違いました。「あなたは年を重ねて、老人となったが、占領すべき土地はまだたくさん残っている。」と言われたのです。

上智大学に、デーケンという先生がおられますが、「**第三の人生**」という本と書いておられるようです。先生は、本の中で、「**人間が一生涯で発揮する力は、持っている力の 10% にすぎず、残りの 90% は眠ったまま使われずに、ほとんどの人がその一生を終えて行く。しかし、この老年期こそ、90% の部分に手が付けられ、大いなる可能性が開花する。**」とされています。若い時には、どうしても自分の意識的な働き、自我が全面的に出てしまうため、この力を発揮することができにくい。しかし、老人になると、体力が失われ、自分の限界に気づくようになるので、そうした無意識の部分が開発されやすくなるのだそうです。しかも、若い時には、どうしても自分の願望や欲望に振り回されて、本当に大切な

事柄に集中できない傾向がありますが、老年期になると、大切な事柄に集中して取り組むことができるゆとりが生まれてくるようです。また、若い時は、どうしても自分の力により頼みがちになるので、本当の意味で神様に信頼することができにくいようですが、自分の力をわきまえるようになる老年期になると、真実な神様に信頼し、委ねることができるようになるようです。アブラハムもモーセも老年期、老人になって神様の召しを受けたのです。神様は年老いた者にこそ、神様ご自身の思いを伝え、さらに用いようとなさるのです。

三、老人だからこそ

神様は、ヨシュアに対して、「あなたは年を重ねて、老人となった」と言われました。今のヨシュアは、モーセに仕えていた時のような若さはありません。力もありません。頭の回転もよくないでしょう。あなたは、老人となったので、そこで静かにしていなさい。休んでいなさい。何もしなくていいとは言われぬ。「占領すべき土地はまだたくさん残っている。」と老人となったヨシュアにもやるべきことがあると言われたのです。若い時と同じようにはできないかも知れない。しかし、年を重ねたからこそ、老人となった時こそ、やるべきことがある。自分の弱さを知り限界を知っている自分であるからこそ、神様に頼り、神様に助けていただいでできることがあるのです。

私は、右膝を痛めてから、思うように歩けないという事を経験しました。信号が青から赤に変わる時、元気な時なら、走って渡ることができました。でも、今では、あきらめるしかないのです。信号が青になるまで待つのです。階段は、一步一步、足をそろえてでないと降りたり昇ったりできません。後ろに人がいると気になりますが、早く昇ったり、降りたりはできないのです。何ともはがゆかったり、情けなかったりするのですが、仕方ありません。今では、自分の膝の痛みや弱さを覚えて、自分のできるスタンスで行動しています。

私が右膝を手術した後、毎日リハビリをするのですが、リハビリの部屋には様々な方がおられました。車椅子で移動する人、自分では身動きできない人。このような人でもリハビリをするのか、と思うほどの重症な方もおられました。歩くという人間にとって、当たり前前ができないのです。しかし、少しでも歩けるようになることを目指して、リハビリを続けておられました。私も、車イスから歩行器、歩行器から杖、杖から杖なしで歩けるようになりましたが、まだまだ膝を曲げることがなかなかできないので、不自由な生活が続いております。そのような中でも、先週は上芦別教会の補修工事のお手伝いできたことは感謝なことでした。退院して数日だから何もしなくていいとも考えられますが、動くことでリハビリになったようにも思います。

私たちは、小さく弱い者ですけれども、弱いから何もできない。小さいから何もできないというのではなくて、弱さを持ちながらも私たちにはできることがある。小さいけれども、小さいなりにできることがあるとヨシュア記13章1節は言っているように思うのです。

ヨシュア記14章には、カレブの事が記されています。10節、11節には、「今日わた

しは。八十五歳ですが、今なお健やかです。モーセの使いをしたあのころも今も変わりなく、戦争でも、日常の務めでもする力があります。」と彼は言っています。勿論、若い時と同じ体力はないでしょう。敏捷性や頭の回転も衰えているでしょう。しかし、八十五歳という年齢であるけれども、老人であるからこそ、神様の信頼し、神様が自分を通して事を成し遂げて下さるとする信仰があったのだと思うのです。

私たちは年を重ねたからこそ、自分の弱さや限界を知り、だからこそ、共におられるイエス様に信頼して歩んでいきたいと思うのです。

Ⅲ 結論部

イエス様は、私たちのために弱くられました。十字架の上で犯罪者となりました。それは、私たちの罪を赦すためでした。私たちの罪を赦すために、私たちを愛するがゆえに、十字架の上で尊い血を流し、命をささげて下さったのです。私たちのために死んで下さったのです。しかし、死んで終わりではなく、よみがえられて私たちに永遠の命、復活の望みを与えて下さったのです。私たちは、このような愛で愛され、イエス様が共にいて下さるのです。

私たちは、年を重ねて、老人となって、マイナス面ばかりに目を奪われるのではなく、弱さを感じれば感じるほど、老人力を発揮したいと思うのです。忘れることが恵みとなる。覚えられないことが恵みとなる。目が見えなくなることが余計な事を見なくてすむようになる。耳が遠くなって、余計な声を聞かなくてすむようになる。そのように老人力を発揮したいと思うのです。パウロは言いました。「**なぜなら、弱い時にこそ、私は強いからです。――無力であればあるほど、それだけ、キリストによりすがりようになるからです。**」(リビングバイブル第二コリント12:10) イエス様がいつも共におられ、私たちを強め、支えて下さるので、弱い時にこそ私は強いのです。できない事が多くあります。だからこそ、イエス様に頼れるのです。無力であればあるほど、イエス様にすがってまいりましょう。この週も、このお方が私たちと共におられます。年を重ねて何もできない。することがない。賜物や力がないから何もできないと思っている私たちに神様は言われるのです。「**占領すべき土地はまだたくさん残っている。**」やるべきことがあるとうことです。イエス様に助けていただいて、私たちもこの週、私にできることをしていこうではありませんか。